

## 異なる学年間の交流で 生まれる大きな繋がり

## 餅つきに見る「学校で は教えられないこと」

## 地域活動の縮小と 子どもたちの「顔」

「竹馬の練習手伝うよ！」

「みんなでドッジボールしよう！」

取材中、子どもたちが学年に関係なく一緒に遊ぶ光景をよく見かけました。上級生が下級生の面倒をよく見ているという印象で、学年間の壁を感じません。

諫山校長は、「運動会も赤・青・黄のチームで協力して盛り上げますし、入学式や卒業式にも、全年生が参加します。6年生は新しく入ってくる1年生を迎え、1年生は卒業する6年生を送ります。そういうことから、桂川東小学校は子どもたち同士の繋がりがとても深いんです」と目を細めます。小学校を卒業しても、学校を訪ねてくる子ども多いそうです。



この日、桂川東小学校の校区を中心に活動する団体「桂川『ひまわり』アンビシャス広場（以下「アンビシャス広場」）主催による餅つきが行われました。多くの地域の人々が集い、子どもたちは重い杵を持ち上げて、一生懸命餅をつき

上げました（21ページでも紹介）。餅つきといえば、以前は各家庭や地域で広く行われていました。しかし、最近では杵や臼を使って餅つきを行うことが少なくなってきました。

「学校で教えることができないことを教えていただいて、本当にありがたいです」と話す諫山校長。「餅米を杵でついて餅ができるまでの過程や、つき立ての餅の柔らかさなどは、子どもたちが自分で体験しなければわかりません。餅つきに限らず、学校では教えることができなかったり、学校で教えてもうまく伝わらなかつたりすることが、子どもたちにはたくさんあるんです」と語気を強めます。

「子どもたちには、顔」がありません。学校で見せる顔。家庭で見せる顔。友だちに見せる顔。それぞれの顔によって、教えることができる、または教えやすい事柄が異なります」と、諫山校長は続けました。

かつて子どもたちは、地域の活動を通じて、学校で学ぶこと以外の色々なことを学びました。しかし、少子高齢化や社会の風潮の変化によって、地域での活動も縮小傾向にあります。その中でも子どもたちが見せるはずの「地域での顔」が少なくなり、地域から学ぶ機会が減ってきています。

アンビシャス広場は、そんな状況を解決する場として、大きな役割を果たしています。

## 子どもと地域の交流 「アンビシャス広場」

「子どもたちの居場所を作りたい。そんな思いが始まりましたね」

体育館で楽しく遊ぶ子どもたちを見つめながら、アンビシャス広場の太郎浦博さんは、笑みをこぼします。

アンビシャス広場は、毎週木曜日の放課後と土曜日の午前中が主な活動日。子どもたちは、桂川東小学校の体育館で、なわとび、鬼ごっこ、ドッジボールなどで遊んでいます。体育館内のミーティングルームでは、折り紙や将棋、囲碁などで遊ぶ子どももおり、アンビシャス広場のスタッフは、子どもたちが思い思いに楽しく過ごせる環境を作り、見守りを行っています。

また、踊り、習字、俳句、茶道などの体験活動も行っています。特に踊り教室では、着物の着付けなども体験し、地域の敬老会で練習の成果を披露するなど、子どもたちに人気の活動です。

アンビシャス広場のスタッフは地域の人々。活動日以外にも、朝の通学路を見守りながらあいさつを行う「おはよう会」や、月に1回、朝の学習の時間の「本の読み聞かせ」などを通して、子どもたちと交流を行っています。

## 笑顔あふれる 桂川東小学校

太郎浦さんは、「子どもたちが楽しく過ごせるよう、私たちも試行

錯誤の繰り返しです。今は卓球をもっと取り入れようと考えているところですが」と常に意欲的。

このアンビシャス広場でも、子どもたちは異なる学年同士、入り混じって遊びます。

悪いことや危ないことをしようとする、上級生やアンビシャス広場のスタッフがきちんと叱り、叱られた子どもも素直に受け止め、反省します。お互いの「顔」が見えるからこそできることです。

桂川東小学校の学年間の交流と地域に根ざした取り組みは、子どもたちの健全育成にも大きな影響を与えています。

いつも笑顔が絶えず元気な声が響く桂川東小学校を見ていると、「社会性の発達不足」などという懸念は杞憂であると感じました。

